

2015.1.29
16:30

人生の贈りもの

京大人文科学研究所所長 山室信一(63)

9

「反時代」の目 集団的自衛権を見る

——第一次安倍政権下で憲法改正ムードが高まり、「憲法9条の思想水脈」(2007年)を出版。日本の平和思想は幕末からあったと論じて司馬遼太郎賞を受賞しました。

の名を冠した賞をいただくというのは運命のいたずらのように思います、と授賞式であいさつしました。会場では笑いがもれましたが、本音です。

自分の人生を振り返ると、どこか時代に乗れなかった気がします。「反時代」と言うのがひげますが、これまでの研究で



司馬遼太郎賞の選考委員で護憲運動に携わった故・井上ひさしさん(左)と。「そろそろ次の世代の出番です、と言われました」=本人提供

も流行の方法やテーマに即応できず、憲法や戦争、法政思想を手掛けていたのですから。でもいま、思わぬ方向に風向きが変わってきていると思います。

節目となった昨年、欧州を中心にさまざまな国際会議が開かれ、後世にどうやって記憶を伝えていくかが話し合われました。一方、日本は戦勝国として「五大強国」の一員になったにもかかわらず、第一次大戦のまとまった研究はないに等しかったのです。9年前、京大人文研を中心にも多様な分野の研究者が集まって共同研究を立ち上げました。

「私たちが心がけるべき」とは。これまで研究を続けてきて強く意識したことは、するすると時代の趨勢に乗ってはいけないということ。ざらざらとした感じで時代に付き合っていくというか、常に時代の大勢と違うスタンスをあえて取る決意が必要だということ。ただ、周りと異なる見方を維持するのは難しい。丸山眞男さんの父でジャーナリストの丸山幹治は日露戦争の前に「アームド・ピース」論を痛烈に批判しました。やはり見るべき人は時代の問題点を的確に見ていたですね。私も歴史的視点を大切にしたいと思っています。

昨年、集団的自衛権の行使容認が閣議決定されましたね。それを受けて、今年の国会は安全保障に関する法案の成立が想定されています。急にそんな流れになってきました。集団的自衛権に依存してはならないというのが第一次世界大戦に学ぶべき教訓のほうなのですが。

第一次大戦の本質は集団的自衛権、つまり軍事同盟の末の衝突だったと思われれます。1国では不安だから他国と軍事同盟を結んでいった結果、小さな衝突をきっかけに多くの国が戦争に巻き込まれ、しかも単独では停戦できなくなりました。当時の支配的な考え方は「アームド・

ピース」(武装的平和)。平和を達成するには武装しなければならぬという論理です。日米同盟の強化という今の抑止論と通じるところがありますね。

(聞き手・河野通高)